

中世加太谷の城と館

竹 田 憲 治

はじめに

亀山市関町加太は、JR関西本線にそった山間の小盆地にある集落である。関から加太を越え、柘植に向う道は、鈴鹿越えの道が開通する以前には、大和と伊勢を結ぶ官道であり、近世には大和街道の宿駅ともなっていた。中世には関氏の一族とされ、この地を本貫地とする加太氏⁽¹⁾が城⁽²⁾を構えていたとされている。

盆地内には、加太氏に関連する遺跡がいくつかみられる。特に盆地北山頂の鹿伏兎城は、中世の遺構を良好に残す山城として、昭和56年に県史跡に指定されている。

しかし、山麓にあるとされる館跡には2つの説がある。一つは昭和52年に関町教育委員会から刊行された『関町史』を代表とする、神福寺とする説、もう一つは平成12年に三重県埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われ、平成15年に報告書が刊行された『市場遺跡発掘調査報告』を代表とする、字「市場」とする説である。

本稿では、近世から近代に至る諸資料、発掘調査の成果、山城の構造、地籍図などを検討し、加太氏の城館および中世加太谷の景観を明らかにしたい。

1 近世・近代の地誌類にみえる加太氏関連遺跡

本章では、近世以降の地誌や絵図で、加太城跡や館跡がどのように叙述されているのかを確認し、それぞれの時代の研究者が、加太氏関連遺跡をどのようにとらえていたのかを検討する。

資料1 『勢陽雜記』 明暦2年(1656)⁽³⁾

「一 鹿伏兎 (中略) 鹿伏兎氏、歴代の屋敷地、下加太村の川端に有り。(以下略)」

資料2 『三国地志』 宝暦13年(1763)⁽⁴⁾

「鹿伏兎城 按下加太村字市場ノ上方ニアリ 西郭東西二十五歩 (中略) 又下ノ城トテ東西三十歩 南北三十二歩 濠四十八歩 全郭周壘方六十歩ハカリ是居主詳ナラス (以下略)」

資料3 『勢陽五鈴遺響』 天保4年(1833)⁽⁵⁾

「鹿伏兎城址 上下二処アリ 上ノ城址ハ (中略) 下ノ城ハ下加太村川崎ニアリ 鹿伏兎豊前守弟左京進住ス (以下略)」

資料4 『大日本国誌』 明治年間⁽⁶⁾

「鹿伏兎城址 一二白鷹城ト称ス 鈴鹿郡加太村字市場ニ在リ 今雜木茂生シ 墓濠ノ址尚存シ (中略) 又字御屋敷ニ宅地ヲ存ス 鹿伏兎氏代代ノ居宅ナリト云 (以下略)」

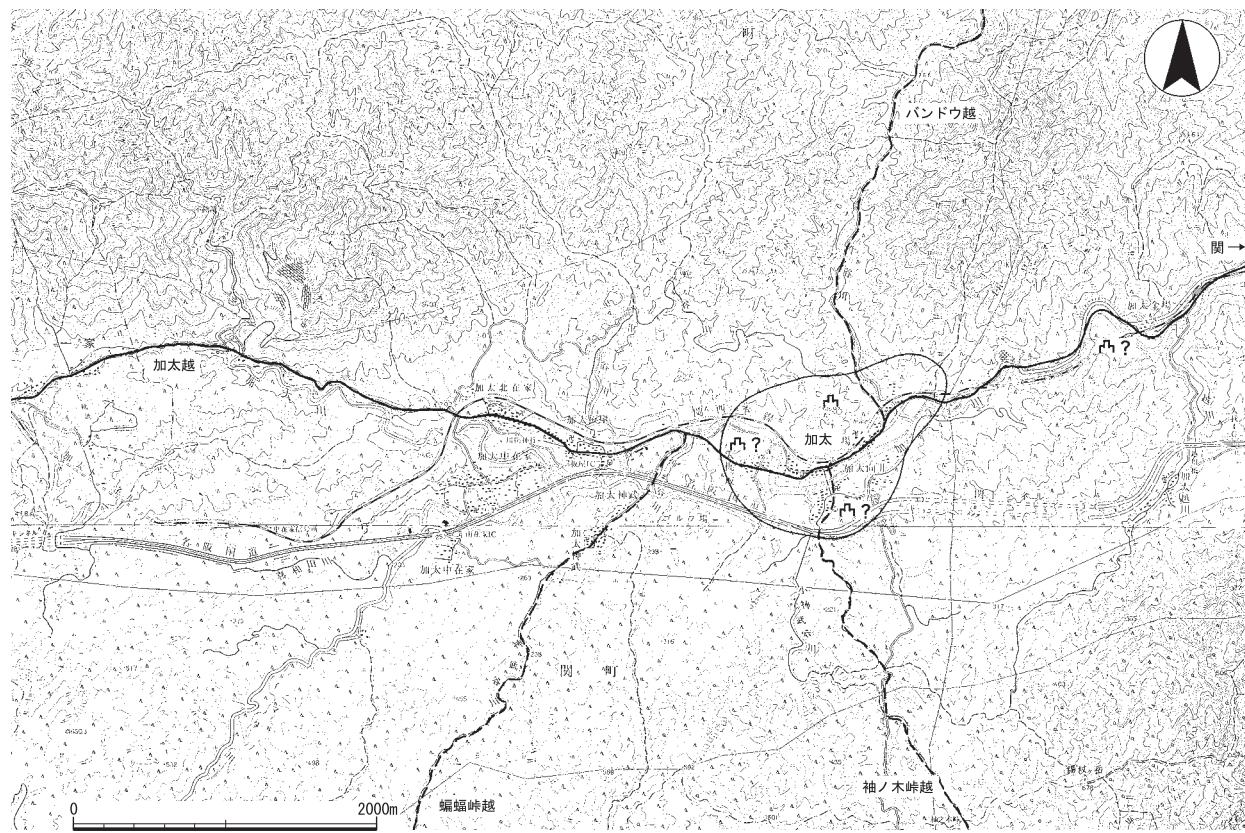
資料5 『鈴鹿郡郷土誌』 大正4年(1915) 昭和56年復刻⁽⁷⁾

「鹿伏兎城址=上下二ヶ處あり。上の城址は上加太の内字市場ヶ坂にあり。下の城址は下加太村川涯にあり。鹿伏兎豊前守弟左京進之に住す。(以下略)」

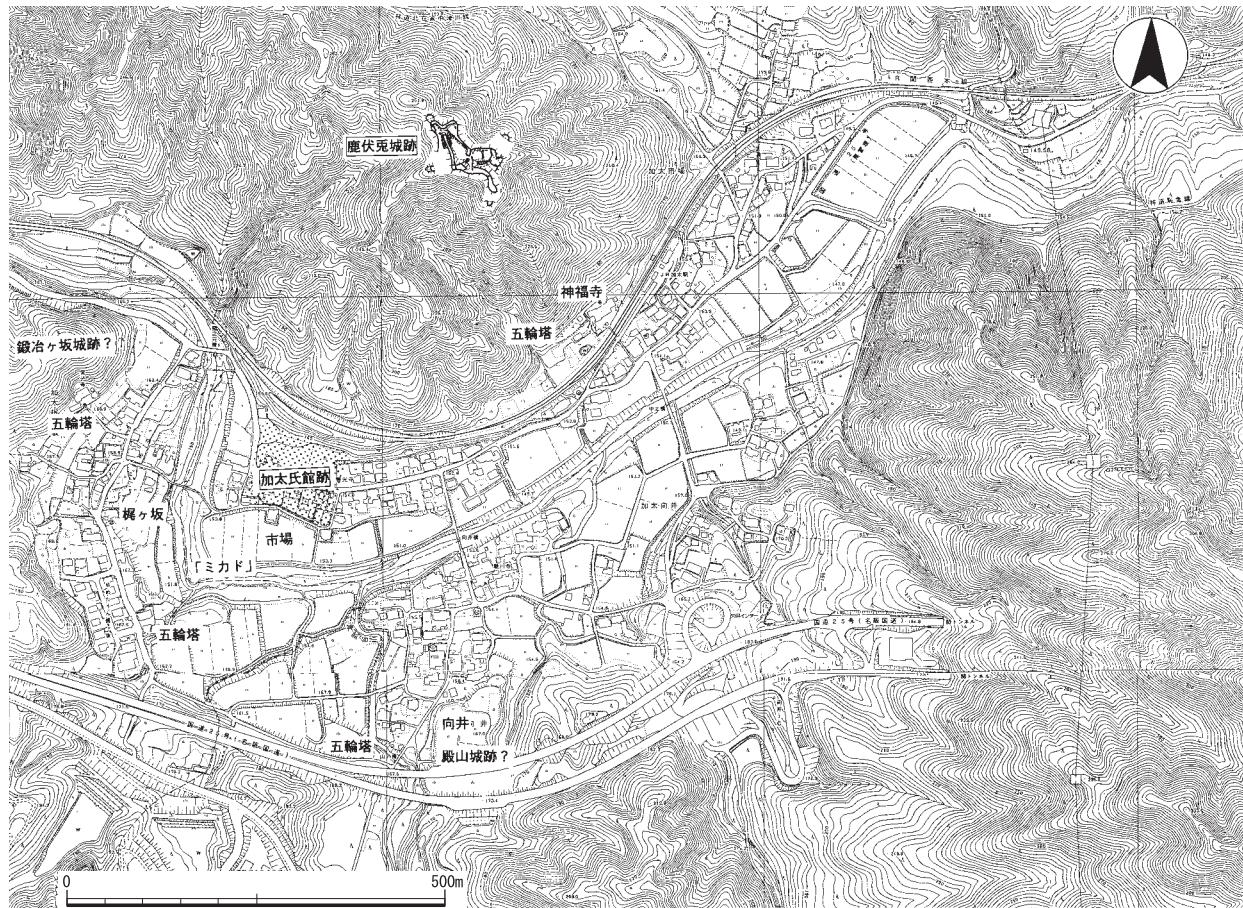
資料6 『亀山地方郷土史』 昭和34年(1959) 昭和45年復刻⁽⁸⁾

「四郎盛宗 (中略) 城地は二ヶ所あって一は市場下加太の西端平地にあって今はその位置を知ることができるものであり、一は市場の北、八丁、奥野平一三一五番地にあったので今俗に城山と呼び一見して城壘のあったことが知られる (以下略)」

これらの記述からは、加太氏の「城」とされる遺構は2つあり(資料2~6)、一つは下加太村の字「市場」付近の川に近い平地(1~3、5・6)、一つは山上(2~6)にあることが確認できる。特に『三国地志』には、「下ノ城」



第1図 加太谷の位置 (1:50,000) [国土地理院 1:25,000 地形図「鈴鹿峠」・「平松」より]



第2図 加太谷の諸遺跡 (1:10,000)

の周囲には「濠」があり、『大日本国誌』には城が字「御屋敷」にあったとの記述がある。

また、江戸時代の文化3年（1806）に描かれた、『加太越奈良道見取絵図』⁽⁹⁾には川のほとりに字「中屋敷」という記述がある。この部分で大和街道が屈曲し、山裾から伸び、街道に沿って直角に折れる土手状の遺構が描かれる。「中屋敷」の北東隅からは、細い道が伸びており、この道は山上の「古城跡」に繋がっているように見える。

以上、加太氏関連遺跡の近世以降の地誌類をみてきた。これによると近世以降、昭和30年代までの研究者は、加太には山上と平地に城館があったと捉えていたことが明らかである。絵図の記載により、字市場には「中屋敷」という地名があったことも読み取れる。これは『大日本国誌』に城があったとみえる字「御屋敷」とも符合する。ところが昭和後半以後の資料から、加太氏関連遺跡の記述に変化がみられる。



第3図 近世加太の絵図（註（9）文献より）

資料7 『関町史』 昭和52年(1977)⁽¹⁰⁾

「(前略) 左京亮定俊は、応永元年(1394) 城のふもとに新福寺(のちの神福寺)を創建し、鹿伏兎家の菩提寺とともに、平時はここに居住し、城下としての構えを作っていた。(以下略)」

資料8 『三重の中世城館』 昭和52年(1977)⁽¹¹⁾

「鹿伏兎城 (中略) 山麓の神福寺は、城主の居館と思われ、神福寺を中心とした東西150mは家臣の館であつたともいわれている(以下略)」

資料9 『定本 三重県の城』 平成2年(1991)⁽¹²⁾

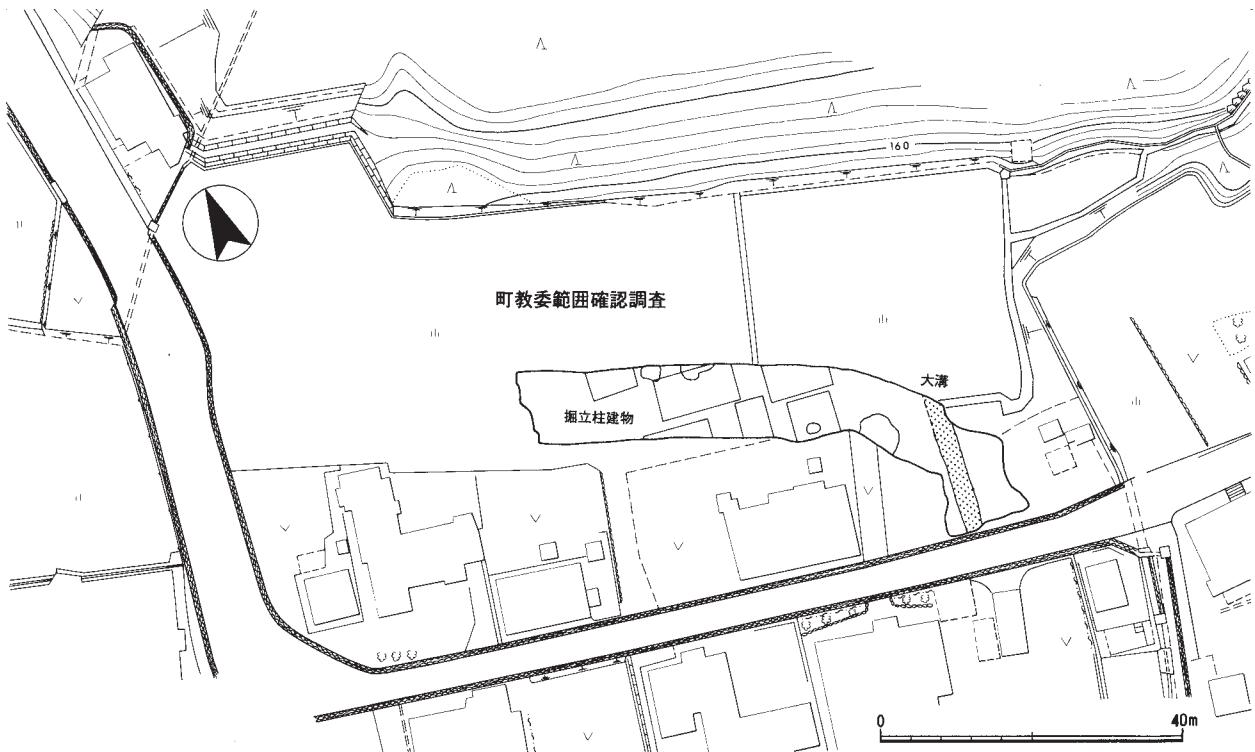
「鹿伏兎城 (中略) 山麓には鹿伏兎氏の墓と伝える五輪塔がのこる神福寺があり、居館跡と推定される(以下略)」

7~9で注目すべきは、近世から昭和30年代までの諸資料で、川に近い平地にあるとされていた加太氏の館(=下ノ城)が、昭和50年代以降の諸資料では、神福寺(字「中出」)にあったというように変化していることである。この変化に至る根拠は示されておらず、何をもって神福寺を「居館」としたのかは不明といわざるを得ない。

2 発掘調査の成果

三重県埋蔵文化財センターでは、平成12年度に国道25号線改良事業に伴い、字市場地内で発掘調査を行った。本章では、その結果を検討し、発掘調査地点の性格について考察したい。

発掘調査は字市場の西端部で行った。中世遺構面の調査面積は1,300m²である。中世遺構面からは中世前期・後期の遺構・遺物を確認した。このうち中世後期(15・16世紀代)では、6棟の掘立柱建物(S B 39~44)、土師器皿廃棄土坑(S K 3・8)、東限を区画する大溝(S D 31)を検出した。掘立柱建物はすべて建物方位が一致(N 11° W)する。建物としてまとまらなかったが、他にも多くの柱穴がある。土師器皿廃棄土坑には、土師器皿が大量に投棄されていた。調査時の所見では、S K 8の土師器皿は一度に投棄されたような出土状況を示す。S D 31



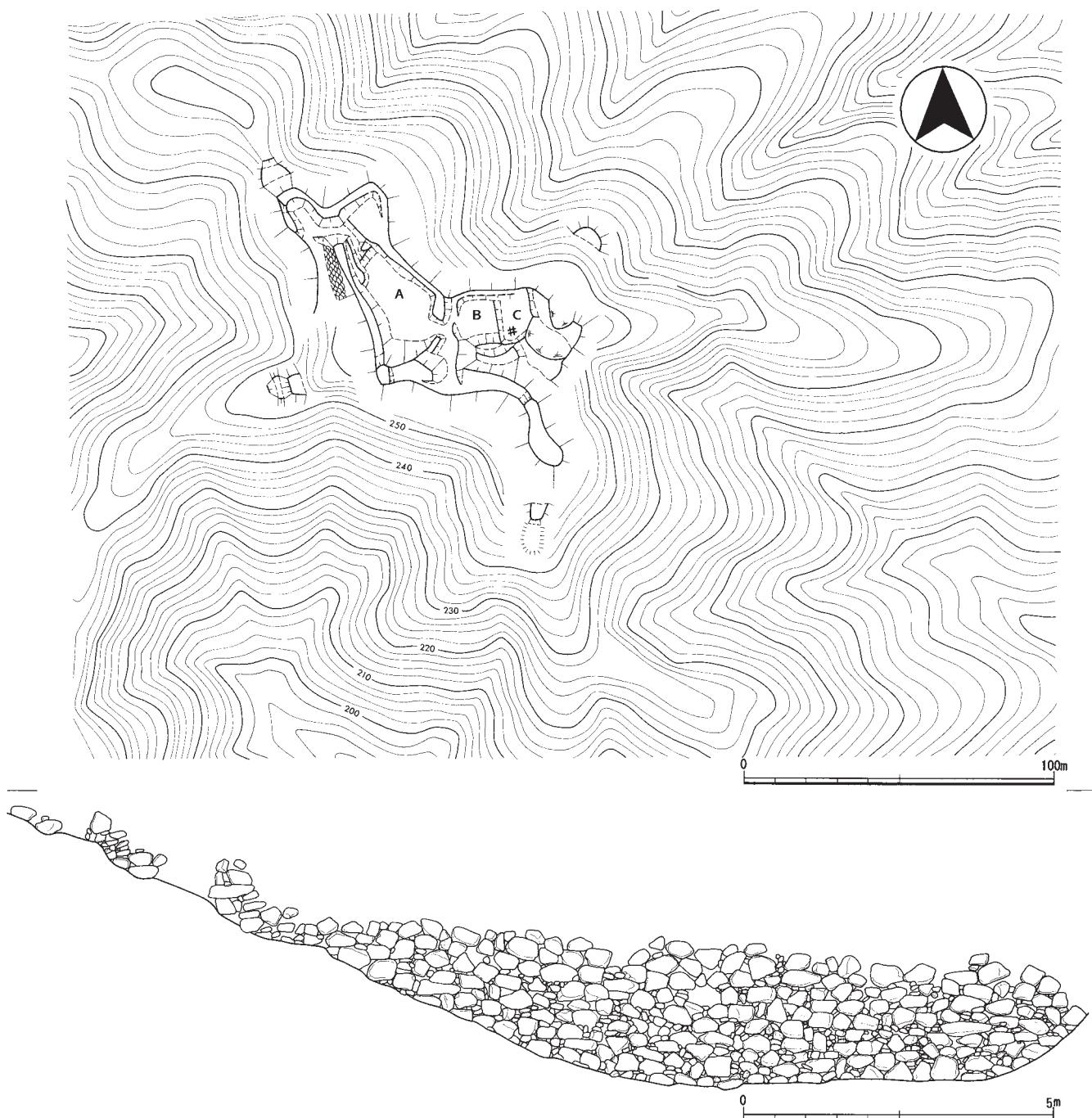
第4図 発掘調査の成果 (1:1,000)

は幅 1.8 m、深さ 1.3 m で、西側（建物側）が東側より 1 m 程高い。屋敷地の東限を画す溝と考えられている。このほか SK 9 は大溝に連結する小溝を持つ大型の土坑である。

出土遺物は、15 世紀後半から 16 世紀代のものが主体を占める。前述の大量の土師器皿のほか、古瀬戸の水注や瓶子、青磁の盤、「二貫七百文」の墨書がある土師器皿の破片などがある。

その後、関町教育委員会により、国道の北の宅地部分の埋蔵文化財範囲確認調査が行われた。その部分でも土坑などが確認されており、遺構はさらに北まで広がっていた可能性が高い。

以上の結果から、発掘調査報告書では調査地は、「鹿伏兎氏の居館に相当する」もしくは「かなり鹿伏兎氏に近い有力層の屋敷」としている。筆者も、発掘調査担当者と同じく、方位を一にした建物群、土師器皿大量廃棄土坑、屋敷地の内外を分ける「堀」の存在、出土遺物の質から、調査地点が前章の資料 1 から 6 にみえる加太氏の「歴代



第 5 図 鹿伏兎城跡（1:2,000）と石垣（1:100）

の屋敷地」・「下ノ城」にあたると考える。

3 城郭遺構の検討

本章では現況で確認できる城郭⁽¹¹⁾の現状を示し、館との関係を検討する。

鹿伏兎城跡は、加太谷の北部の標高263mの山頂に立地する。山頂には5m四方程の平坦地があり、細尾根が北西と東に延びている。曲輪群は細尾根の北側に展開する。城郭の中心には26m×10mの曲輪Aがある。曲輪の北側には低い土塁が巡る。曲輪の南の細尾根も土塁の役割を果たしている。曲輪の東西には虎口がある。東側の虎口は15m四方程の曲輪B、井戸がある曲輪Cに続いている。井戸は直径2.2m程である。それより東には土砂崩れによる崩落があり、観察は困難である。西の虎口を出ると道は狭くなり、さらに左に2度折れて山麓からの道に出る。麓から虎口に向う部分には石垣がある。石垣は現状で長さ17m、高さ2.3m程が残存する。

神福寺から城に向うと、何ヶ所かの急崖を上る。城にたどり着いても、南の細尾根に着き、虎口に入ることはできない。発掘調査地点から城に向うと、石垣を持つ虎口に着く。

鹿伏兎城跡以外に『三重の中世城館』には、加太地内に所在する城として、「鍛冶ヶ坂城」、「殿山城」、「平ノ沢城」の記述がある。これらの城では、現地で遺構を確認することはできず、近世以降の地誌類にも登場しない。

4 地籍図の検討

本章では、加太地区の地籍図を検討する。加太地区の地籍図は、法務省龜山出張所（現在は津地方法務局に統合）に残る。作成年は明記されていないが、明治23年（1890）に敷設される関西本線が図中ないことから、それ以前に作成されたものと思われる。図中には分筆線も入っている。

まず神福寺周辺の地割を検討する。この部分の字は「中出」である。図中に示す部分が神福寺であるが、周囲には特徴的な地割は看取できない。次に発掘調査地点周辺の地割を検討する。この部分の字は「市場」で、西から盆地に入ってきた大和街道がB地点で北に折れ、C地点にて再び東に折れている。これは『五街道其外分間絵図』の



第6図 地籍図の状況

描写とも一致する。その屈曲部分の西に、細道と水路に挟まれた方形の地割を確認することができる。現地でも A – B 間では南側より北側が高い。

5 遺物散布・残存地名・石造物

本章では、中世遺物の散布状況、残存する地名、中世のものと思われる石造物から、加太盆地内での中世集落の広がりを検討したい。

中世の遺物は、盆地内の多くの水田・畑に散布している。ほとんどが水田や畑 1 筆に 5 点未満の出土で、盆地全域に濃密に散布するという状態ではない。ただし鍛治ヶ坂、市場集落の南の水田、向井集落の西の水田、盆地の東端などで、遺物が集中して散布する部分がある。地表での遺物散布を見る限り、大集落が盆地全域に広がっていたとは言い難い。

残存地名では、発掘調査地点の南の水田に「ミカド」と呼ばれる地名が残っていることを確認した。館に関わる地名である可能性がある。

石造物は数地点で集中する。常光寺や神福寺の墓地のほか、鍛治ヶ坂の南、向井の西には五輪塔が集中する地点がある。付近に中世墓が存在する可能性が高い。

おわりに

これまで検討してきたすべての資料、近世から昭和 30 年代までの諸資料・絵図、鹿伏兎城跡の構造、地籍図などの状況、発掘調査で確認された東端の堀、土師器皿大量廃棄土坑、方位を一にした建物群などは、発掘調査地点こそが加太氏の館であることを示している。よって本稿では、発掘調査地点に加太氏の館があり、山上の城と道により連結していたと考える。ただしこれは神福寺が、盆地内の有力寺院、所伝にあるような菩提寺である可能性を否定するものではない。

また加太氏の本拠であった加太谷は、遺物や石造物の散布状況から、複数の城館が存在するものの、盆地全体に「都市」が広がっているような状況ではなく、盆地内にいくつかの集落が点在しているような景観を提示しておく。

近世・近代の地誌類や軍記物語は、中世の状況を正しく伝えているのではなく、近世の潤色が多く含まれているものとされている。しかし今回の加太の例では、近世から昭和 30 年代までの諸資料が比較的正確な位置を伝えていたのに対し、昭和 50 年代以降の諸資料が、古い所伝を無視した解釈を行い、その後の歴史像にも大きな影響を与えてしまっていたことが判明した。このことは、近世・近代の諸資料を後世の潤色があるものとして無視するのではなく、近世人の捉えた中世史像を伝えるものとして、十分な史料批判と内容の咀嚼の上で再評価する必要性を示している。

本稿は、平成 12 年から 14 年にかけて加太谷にて調査を行った「中世加太谷研究会」（亀山隆・笠井賢治・山際文則・藤岡直子・濱辺一機・打田典範・茶谷里枝・才木薰・瀧川和也・竹田憲治）の成果によるものである。文末ではあるが、会員諸氏に謝意をあらわしたい。

【註】

- (1) 「かぶと」の表記については、「加太」・「賀太」・「鹿伏兎」があるが、本稿では同時代史料に最も多く現れる「加太」を用いた。ただし県指定史跡鹿伏兎城については指定名称を用いた。
- (2) 「城館」・「城郭」・「城」・「館」については從来から概念規定が混乱している。本稿ではひとまず、周囲のほかの屋敷地と比較して巨大で、山稜部にあって防御性が高く、居住性が低いものを「城郭」、平地にあって居住性が高く、堀や土塁で囲郭するものを「館」とする。両者をあわせて「城館」と呼ぶこともある。
- (3) 『勢陽雑記』(三重県郷土資料刊行会 1968年)
- (4) 『定本 三国地志』(上野古文献刊行会 1987年)
- (5) 『勢陽五鈴遺響』(三重県郷土資料刊行会 1976年)
- (6) 『大日本国誌 伊勢国』第4巻(ゆまに書房 1989年)
- (7) 『鈴鹿郡郷土誌』(三重県鈴鹿郡教育会 1915年 1981年年復刻)
- (8) 『亀山地方郷土史』第1巻(三重県郷土資料刊行会 1970年)
- (9) 『加太越奈良道見取絵図』第1巻上(東京美術 1998年)
- (10) 『関町史』(関町教育委員会 1977年)
- (11) 『三重の中世城館』(三重県教育委員会 1977年)
- (12) 『定本 三重県の城』(郷土出版社 1991年)
- (13) 鹿伏兎城跡の縄張図には、三重県教育委員会によるもの(『三重の中世城館補遺』1981年)、伊賀中世城館調査会によるもの(『城館調査の記録』2000年)、藤岡英礼氏によるもの(「伊勢国における織豊期—鈴鹿郡峯城を中心として—」『中世城郭研究』第8号 1994年)などがある。今回は、伊賀中世城館調査会による図をベースにした。鹿伏兎城跡虎口の石垣については、山際文則氏による図(『伊勢の中世』55号 2001年)を再トレースした。

【参考文献】

- 『市場遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2003年)
『大和街道 伊勢別街道 伊賀街道』(三重県教育委員会 1983年)